中世益田講座　第8回（全9回）

益田氏が残した古文書

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0625

私たちが古い時代のことを調べるとき手がかりとするのが、昔の人が残した日記や手紙などで、それらに書かれていることから、いつ頃、誰が、どのような活動をしたかなどを知ることができます。こうした昔の日記などを古記録（きろく）といい、手紙を古文書（こもんじょ）といいます。代表的なものとしては、古記録では藤原道長の「御堂関白記（みどうかんぱくき）」、古文書では「東大寺文書」や中国地方の戦国大名の毛利家が残した「毛利家文書」などがあります。毛利元就の有名な三子教訓状はこの「毛利家文書」に残されています。

中世（十一～十六世紀）の益田を支配した益田氏もたくさんの古文書を残しています。それが「益田家文書」です。近代までを含む「益田家文書」は総数一万八千点にのぼります。また鎌倉時代から近代までの長期間にわたる古文書が残っていることも、多くの時代について知ることができ、たいへん貴重です。これほどたくさんの古文書を残した家は全国でも数えるほどしかありません。

「益田家文書」からは、もちろん益田氏や益田地域の歴史がわかるのですが、それだけではなく、鎌倉幕府や室町幕府が地方をどのように支配しようとしていたのか、現在の中国地方が当時どのような状況だったのかなど、様々なことを調べることができ、多くの歴史研究者が「益田家文書」を利用しています。

「益田家文書」の大半は東京大学史料編纂所に所蔵され、主に江戸時代より前のものが『大日本古文書 家わけ第二十二 益田家文書』として、全五冊刊行予定の内、現在四冊まで刊行されています。また益田市も『益田家文書の語る中世の益田』として、南北朝時代の兼見、室町時代の兼堯、戦国時代の藤兼・元祥の各時代について、文書の写真に読み下しや解説をつけて全三冊を刊行しています。これらの刊本によって比較的容易に「益田家文書」を利用できます。（いずれも市立図書館で閲覧・借用できます）

皆さんも「益田家文書」を使って中世のことを調べてみませんか。

「益田家文書」より、室町幕府三代将軍足利義満が益田兼見（祥兼）の所領を認めたもの。

「益田家文書」より、益田兼堯書状。左下に兼堯の署名と花押（かおう）（サイン）があります。